九州・銀匠

月之繭　著

山田　俊訳

この話は聞いたことがないだろう。

我が家の隣のあの背の曲がった老人は、河絡族の老銀匠だった。彼は家族を持ったことはなく、一人の羽人の娘のために、生涯をかけて銀の腕輪を作り上げたそうだ。実は彼は俺の女房とちょっとした知り合いだったんだ。彼はいつも我が家の屋台麺を食べに現れ、そうこうするうちに、女房と話しをするようになり、彼には多めに麺を盛ってやっていた。老銀匠は時々何かぶつぶつと話をしていた。天啓城に住んでいたことがあるらしく、そこは随分と賑やかな街だが、浮生巷と呼ばれる寂れた通りがあって、彼はそこに長年住みつき、そこの住人の娘達が嫁入りする時の銀飾をたくさん拵えてやったそうだ。ところが、女房が例の腕輪を話題にすると、彼はふいに口を閉ざしてしまう。老銀匠の話なんざ俺は特に知りたくもなかったさ、大した知り合いでもなかったからな。女房があれこれと老銀匠の話をするのを聞きながら夜の仕事をしていたあの頃、まさか自分が老銀匠に簪を頼むことになるとは思ってもいなかったよ。

この簪をあつらえたのは、重い病の女房のためなんだ。俺と女房は共白髪まで添い遂げるつもりだったよ。でも世の中、そう上手くはいかないもんだ。

俺の頼みに、老河絡は暫く黙っていたが、俺を裏庭の井戸まで連れて行った。井戸と言うよりは、老河絡が物を収納するための穴倉と言った方がいいかな。彼は素早くそこに潜り込むと、すぐに真っ黒な銀の箱を抱えて這い上がって来た。

「藍松石を埋め込んだ銀細工の簪を作ってやろう」そう言うと、老河絡は溶銀炉を準備し、果木炭を加えて銀を溶かし始めた。

老河絡は楽しそうだったが、俺の方はちょっと戸惑った。女房の話だと彼はもう随分と長く銀細工を作っていないらしい。彼の名を聞いた大金持ちが大枚払うと言ってもだめだったそうだ。俺はたくさんの理由を考えていたんだ、何とか彼をその気にさせようとしてさ。女房との恋話とか、女房の夢とか、女房が夜な夜な彼にした話とか、女房の重病と俺の無念とかを彼に話すつもりだった。でも、「重病の妻に簪を一本作ってくれないか、手の込んだ簪が女房が俺に嫁に来た時からの願いなんだ」とだけ言うと、彼は直ぐに俺を穴倉に連れて行って、長年封印していた銀箱を開けてく

れたんだ。
老河絡は俺が戸惑い不思議に思っているのを見抜くと、鞴を操り、溶けだした銀の具合を見ながら、口にくわえていた氷粉吸収のための管を下ろして蓋をした。そしてようやく口を開くと、「一つ話をしてやろう」彼は話しながら、溶けた銀を油槽に流し込み、銀材を作ると叩き始めた。
「わしは部落一の腕を持つ銀大師の下で修行した。すぐに諸国流浪に出かけ、著名な銀器職人になる決意をした。瀾州、寧州、中州を放浪し、帝都天啓に到達したところで彼女と出会った」
老河絡の寂しげな声は、銀を叩く音の中で静かに響き、「彼女」と口にした時には僅かに震えていた。彼は熟練の腕で、細い銀の塊を銀の螺鈿に仕上げると、松香、清油と加えて柔らかくし、厚い木の板に塗り付け、ゆっくりと焙り始めた。
「あれは粉雪が舞う冬の夜だったかな。わしは酒屋で酒を買うと、早く帰って仕事を済ませるつもりだった。酒屋の風よけの雪毡をめくり上げると、冷たい空気が細かい雪とともに天啓の城下を包んでいた。息を一口吸うと、胸一杯に冷気が広がった。通りを行く人の姿は少なかったから、銀の翼を広げた彼女にすぐに気付いたよ。それは美しい翼で、光り輝いているようだった。彼女は何も言わなかったが、わしを待っていたことはすぐにわかった。もしかしたら、道すがらずっとわしと一緒に歩いていて、わしがそれに気付かなかっただけなのかもしれん。彼女が一枚の図面を差し出すと、それは銀制の胎弓の製図だった。弓には複雑な模様が描かれていて、小さな篆字の表記もあった。わしは世にも稀な宝物のように図面を握りしめた。彼女は弓を受け取る時期を言わなかったが、どんなに複雑な模様でも、三日以内に仕上げてやると、わしは密かに意を決した。わしは風を切って家に駆け戻りながら、頭の中では、彼女がずっとわしの後をつけていたことを考えていた。物陰からこっそりわしを窺い、他の人に作った銀器の一つ一つを見て、わしの腕前を吟味していたんだ。繰り返し繰り返し、そして、この大寒の頃、彼女はとうとう弓の図面をわしに渡し、一生携えることになるかもしれない弓をわしに作らせることを決めたんだ。そう思いながら、あの水のように澄んだ瞳に見つめ続けられていたのだと気づくと、心に熱いものがこみ上げてきた。まるで青陽魂陳酒の酒壺を飲み乾したかのようにな」
羽人の娘の話をしたためか、それとも細かい細工をしていたためか、彼の話し声は穏やかになっていた。彼は引き伸ばしたばかりの銀糸を螺鈿の輪郭に合わ

せ、色々な型の金杭や名前もわからないような様々な道具を使って、薄く延ばした銀材の上に花弁や葉の模様を刻みだしていた。そして、花や葉の形と寸分違わない藍松石の螺鈿を銀糸が取り囲んだ枠の中にはめ込んでいった。彼の熟練の技術は流れるようで、長年銀器を製作していなかったとは思えなかった。

老河絡の様々な道具を持つその無骨な手は、この時、俺が見ている前で少しずつ姿を変え、色々な形の様々な味の麺を作る女房のあのしなやかな手に変わっていった。

老河絡は楽しそうな声で俺を現実に引き戻すと、

「三日後、白藤の唐草模様、白銀の薔薇の花に各種の宝石を象嵌（ぞうがん）した象牙の胎弓と、特別に作った矢先に篆字を刻んだ十本の矢を作業台に並べ、矢筒を作りながら彼女が現れるのを待った。夕方頃、あの純白の翼を広げて、彼女は静かにわしの庭に舞い降りた。彼女は準備した弓と矢を目にすると、一瞬その目に歓喜を浮かべたが、それは直ぐに消えた。わしはもちろん密かに喜んださ。彼女がわしの仕事を気に入ってくれただけではなく、弓が出来上がったことをこんなにもすぐに知ったというとは、彼女は毎夕、こっそりと様子を見に来ていたに違いないからだ。だが、ちょっと目を俯せ、そして再び顔を上げた時には彼女の姿は消えていた。作業台の上の弓がなくなり、代わりに精緻な花模様の銀袋が置かれていなければ、彼女がやって来たのは夢だったと思ったかもしれない。彼女が鶴雪（かくせつ）の一人であることをわしは知った。それからというのも、時折、銀器を作った残りの銀で、同じ形状の矢を作るようになった。出来上がるごとに、作業台の上の彼女の身体にあわせて作った矢筒に入れておいた、彼女が取りに来るのを期待してな。随分と待ったが、彼女が来ることはなかった。わしは相変わらず矢を作り続け、彼女はきっとまた来ると心の中で言い続けた。だが、彼女は来ることはないと理性がわしに告げていた。彼女は銀器の注文に来たお客で、代金も受け取ったんだから、彼女に心残りはないはずだ」

「だが、三か月後、十本目の矢を仕上げた直後、彼女は月光と共に突然現れた。その顔には疲労が浮いていたが、瞳はいつもの澄んだ水のようだった。だが、矢筒と矢を目にすると、思わず目を輝かせ、この時、初めてわしに微笑むと、夜空に消えて行った」

「わしは相変わらず時々矢を作っては作業台の上に置き続けていた。彼女がいつふいに現れるかは分からなかった。ある時は漆黒の夜、ある時は稲妻が天を切り裂き、暴雨が降り注いでいる時、ある時は日没の太陽が西の空を染めた夕方、ある時は夏の蝉が鳴く午

後、わしが目覚めたら矢筒が影も形もなくなっていた時もあった。彼女は話をしたことはなく、留まることもなかった。いつも矢を手に取るとすぐに立ち去った」

「ある時、それは彼女が最後にここに姿を見せた時だった……」

老河絡は口を閉ざした。俺はいつの間にか話に夢中になっていた。話の続きを早く聞きたかったが、どう急かせばよいのかわからなかった。老河絡が銀の粒を一つずつ銀の枠組みの角に焼き付け、薄藍色に光り輝く小石を埋め込んでいくのを、俺はただ見つめていた。老河絡は嵌め終えた宝石を手に取ると、真鍮で作った金床に乗せ、とても小さな錘でそっと銀細工を一通り叩き、鉄ヤスリでバリを削り落としていった。老河絡は熱心に、丁寧にこれらの作業を進め、細心の注意を払っていた。俺も口を閉ざし、老河絡が銀細工を輝くまで磨き上げ、それを透明な液体を満たした小さい碗に入れるのを見ていた。銀細工が輝き出すと、碗の底には細かい銀の泡が残っていた。

それが終わると、老河絡はバラバラにした宝石を一つ一つ嵌め戻していった。老河絡はもう話をしないのだろうと思っていたが、微かに溜息をつくと、

「その時は、蝉の鳴き声がする午後だった。昼飯を終えてわしはうつらうつらとしていた。目を開けた時、彼女は静かに窓際に座っていた。逆光の中、暖かく柔らかな光が彼女の身体を包み、夢に見る衣裳のようだった。その日、彼女は随分と長く座っていた。夕闇が去り、星々と月が訪れていた。わしは話したいことが山のようにあったが、どこから話せばよいのかわからず、ただ黙っていた。朝日があらわれ、曙が射し始めると、彼女は立ち上がり、その背には光輝く白い羽が現れた。〈彼女は立ち去ろうとしているんだ〉わしは自分に言い聞かせた。この時彼女に何を言ってもう手遅れのように思えた」

老河絡は作業を停めると、管を咥えてゆっくりと一口吸った。

「わしは慌てて叫んだ、〈腕輪を一つ作ってやる、疏影という名だ。必ず受け取りに来てくれ……〉彼女は一瞬動きを停めたが、振り返ることなく翼を広げて飛び去った」

「それから、わしは腕輪の図案を思い描くと、少しずつ色々な宝石を集めた。ゆっくりとこの腕輪を彫り磨き上げ、毎晩眠る前に〈いつもの場所〉に置いた。毎朝、期待を込めて目を開くが、いつも、それはそこに置かれたままだった。彼女はまだ満足していないに違いないと自分に言い聞かせ、叩き続けた。こうして

一日また一日と過ぎ、今に到っているというわけじゃ」

老河絡は長い溜息をつくと、手中の出来上がった銀細工を俺に手渡し、

「持って行け。お前の嫁さんが気に入るといいがな」

言い終えると、俺がお礼を言う間もなく、部屋の中へと入って行ってしまった。

その後、老河絡に会うことはなかった。女房の死後、俺は李家の刺繍娘を後添えに迎え、隣にも新しい住人が越して来た。ある人の話だと、ある夜、銀髪に白衣の羽人が現れ、彼女の腕には美しい腕輪がはめられていたそうだ。河絡の製品を売り歩く商隊が宛州南部で老銀匠に遭ったとも耳にした。彼を蘇行［河絡族の最高技術者に与えられる称号］だと言う者もいれば、そうではないと言う者もいた。（完）

【解説】

中国の幻想小説に「九州系」と呼ばれる作品群がある。殤・瀚・寧・雲・中・瀾・雷・宛・越の架空の九州を舞台に、燹・晁・賁・胤・燮・晟・端・徴の八王朝が興亡を繰り返し、そこに人・羽・夸父・河絡・鮫人・魅の様々な種族が登場する。そして、天に代って道を行う義士集団・天駆と、世界の混乱と崩壊を画策する宗教集団・辰月教とが戦い、雇われ暗殺者集団・天羅と羽族の凄腕戦闘集団・鶴雪が暗躍する。ドラマ化された江南『九州縹緲録』は第四王朝胤を、今何在『九州海上牧雲記』は第七王朝端を、蕭如瑟『九州斛珠夫人』第八王朝徴をそれぞれ描いたものだ。多くの作家が共通コンセプトの下にそれぞれの時代を描き、一大サーガを編み上げ、「九州系」の全容を把握するのは容易ではない。

今回翻訳した月之繭の「銀匠」（潘海天主編『九州幻想　衣上征塵』掲載。新世界出版社、二〇一二年）はどの時代の物語かは不明だが、その高度な技術力の故に軍需産業に巻き込まれることの多い河絡族の一人が、銀職人として晩年を過ごす中で、若かりし頃の鶴雪とのエピソードを語るものとして興味深い。